

**「質的な分析の方法に関する科目」の授業内容
に関する調査報告書**

2006年3月

日本社会学会社会学教育委員会

はじめに

今期社会学教育委員会（任期 2003 年 10 月～2006 年 10 月）は、前期社会学教育委員会（任期 2000 年 11 月～2003 年 10 月）からの引き継ぎ事項として、社会学教育のあり方の検討、とりわけ初学者に対して、社会学を魅力あるものにするために、社会学教育をどうすればよいのか、社会調査士資格認定に関して、質的調査のカリキュラムの検討という 2 つの課題を付託されました。この 2 つの課題は、前期社会学教育委員会が社会調査士資格認定制度の設立に全エネルギーを注ぎ込んだ結果、残されたものでした。

委員会での議論において、2 つの課題に共通するものとして浮かび上がってきたのが、「社会学教育の、(少なくとも学部学生に対する)標準化は可能か」というテーマでした。そこでこの問いに答えるために、戦後日本社会における社会学テキストのレビューと、質的調査のカリキュラムの検討という 2 つの作業に取り組んできました。

戦後日本社会における社会学テキストのレビューの成果は、『社会学評論』223 号（2005 年 12 月刊行）の特集「テキストに映し出される社会学の知 - 大学の大衆化とテキスト革命 - 」に結実しています。

他方、質的調査のカリキュラムの検討をどのように進めるかについて、委員会で議論を重ねるうちに、社会調査士資格認定機構の定める「社会調査士資格取得のための標準カリキュラム」の 7 科目の 1 つとして、「質的な分析の方法に関する科目」（いわゆる F 科目）があり、この科目の授業科目説明書（「F 科目説明書」）が、社会調査士資格認定科目申請の際に、各大学より社会調査士資格認定機構に提出されていますので、これを閲覧させてもらおうということになりました。2004 年 3 月に社会調査士資格認定機構に閲覧許可のお願いをし、閲覧させていただくことができました。本報告書は、閲覧させてもらった 25 大学のべ 56 科目の「F 科目説明書」という貴重なデータから、質的調査のカリキュラムを構成するとどうなるかということを試みたものです。

この作業は、社会学教育委員会のなかに作ったワーキンググループが中心となって進められました。ワーキンググループは、稲月正委員、今野裕昭委員、武田尚子委員、谷富夫委員（50 音順）の 4 名によって構成され、谷委員のリーダーシップのもとに着実に作業

が行われ、本報告書がまとめられました。

今回の作業によって、社会学教育委員会としては、少なくとも質的調査のカリキュラムのミニマムスタンダードは示せたのではないかと考えていますし、本報告書が、出発点になって、質的調査のカリキュラムが一層洗練されていくことを願ってやみません。

謝辞：F 科目説明書の閲覧を許可して下さった社会調査士資格認定機構に、心より御礼を申し上げます。

2006年3月

社会学教育委員会
委員長 友枝敏雄

社会学教育委員会（2003年10月～2006年10月）委員

委員長	友枝敏雄	（担当理事・九州大学）
副委員長	谷 富夫	（担当理事・大阪市立大学）
	今野裕昭	（担当理事・専修大学）
	稲月 正	（北九州市立大学）
	木村好美	（大阪市立大学）
	園田茂人	（早稲田大学）
	武田尚子	（武蔵大学）
	山田真茂留	（早稲田大学）
	米村千代	（千葉大学）

（ は、本報告書ワーキンググループメンバー）

（所属は、2006年3月現在）

目 次

はじめに

目 次

1 . 報告の目的.....	1
2 . 調査の方法.....	1
3 . 結果の概要.....	2
4 . Aタイプ 調査技法と分析技法を中心に.....	4
5 . Bタイプ 調査の進行プロセスを中心に.....	5
6 . 各大学より提供された授業内容の分類 Aタイプに即して.....	6
参考文献	14
資料（「授業科目説明書」見本）	16

1．報告の目的

社会調査士資格認定機構の「社会調査士資格取得のための標準カリキュラム」は7科目で構成されている。その一つに「質的な分析の方法に関する科目」(いわゆるF科目)がある。機構は、このF科目の授業内容を以下のように説明している。

「さまざまな質的データの収集方法や分析方法について解説する科目。聞き取り調査、参与観察法、ドキュメント分析、フィールドワーク、インタビュー、ライフヒストリー分析、会話分析の他、新聞記事などのテキストに関する質的データの分析法(内容分析等)など。」(パンフレットより)

この説明にはF科目で取り上げるべき重要な質的調査法が項目列挙されている。しかし、なお次の二点で補足が必要であろう。すなわち、F科目の授業内容はこれらの項目だけで必要かつ十分なのかどうかの、もう少し立ち入った検討と、諸項目を配列する体系化の視点である。質的方法の授業がいまだ手探りの段階にあるわが国の社会調査教育の現状に鑑みて、必要十分な項目とそれらを整序する基本的視点に関して、ある程度の合意を見出すことは急務の課題といえよう。

そこで本報告では、これらを補足すべくF科目の授業内容の体系的構成を試みる。とはいえ、ここに示す授業内容がF科目の唯一のあり方であるとか標準であると考えているわけではない。たしかに次章で述べる客観的な手続きを経たことによって、一定の内容を示すことができたとは言えるかもしれない。しかし、これはあくまで一つの目安にすぎないのであって、さらなる改良に向けたタタキ台になれば幸いである。

2．調査の方法

まず、2004年3月1日付けで社会調査士資格認定機構に「『質的な分析の方法に関する科目』の授業科目説明書」(以下「F科目説明書」)の閲覧を申し入れた。その結果、同年6月10日付けで25大学のべ56科目の「F科目説明書」の閲覧を許可された。25大学という数は、その時点で社会調査士資格認定制度を導入し、かつF科目を申請している全大学の約70%にあたる。

つぎに、各大学より提供された56枚の「F科目説明書」の「授業内容の詳細」欄(巻末資料を参照)に記載されている15回分の授業内容を1コマずつ切離し、のべ840コマの紙片を得た。これをKJ法を用いて分類することによって、F科目の基本的な視点と項

目に関するタイプの索出を試みた。

3 . 結果の概要

K J法から浮かび上がったF科目の授業内容のタイプは二つである。

一つは「調査技法と分析技法」を中心とする授業のタイプ(これを当面「Aタイプ」と呼ぶ)。その15回分は、第4章「Aタイプ 調査技法と分析技法を中心に」に示すような講義タイトルを付して配列することが可能であろう。もう一つは「調査の進行プロセス」を中心とする授業のタイプ(Bタイプ)。その15回分は、第5章「Bタイプ 調査の進行プロセスを中心に」に示すような講義タイトルを付して配列することが可能であろう。このうちBタイプは認定機構が想定しているもの(冒頭のパンフレットの引用を参照)とは一見異なるので、意外に思われるかもしれない。たしかに、Bタイプに分類しうる講義を開いている大学は25大学中わずか3大学しかなかった。ほとんどの大学では調査技法と分析技法の解説を中心に授業が行われている。しかし、AとBは本質的には何ら異なることは、以下に述べる通りである。

第6章「各大学より提供された授業内容の分類」に、のべ840コマをK J法で分類した結果のうち、Aタイプに即したものを掲載している。ただし、840コマをすべて転記したわけではない。重複その他を除外している。第1～15講の間でコマ数にバラツキがあるのは、ある程度は担当教員による重視度の違いを反映していると見てよいだろう。しかし重複等の削除や必ずしもぴったり納まらないものもあるので、当面は目安程度に受けとめておいていただきたい。また、Aタイプでは「第14講 質的調査の実際」に比較的多くのコマ数が集積したが、これはさらに(a)～(d)に細分類が可能である(12ページ参照)。調査の進行プロセスの解説を中心とするBタイプは、ここの部分を何回かに分けて講義を行うことになる。すなわち、Aタイプの第14講はBタイプの第9～14講に対応している。

Aタイプは調査技法と分析技法が中心である。4ページの第5～7講が調査技法にあたる部分、第8～13講が分析技法にあたる部分である。個々の具体的内容は第6章の当該箇所に当たっていただければ、おおよそ了解可能と思われるので、一々の解説は省略させていただく。むしろここで強調しておきたいことは、Aタイプは調査技法と分析技法が中心ながらも、それだけではなく社会調査の考え方、質的調査のアウトライン、調査と理論の関係、および質的方法と量的方法の関係など、総論的なものも含まれているということ

である。第 1 ~ 4 講がそれにあたる。また、前の段落で指摘したように調査の進行プロセスに関する授業も含まれているし、調査倫理に関する授業もある。第 14 ~ 15 講である。これらの具体的内容についても、第 6 章に詳しい。

同様のことは B タイプにも指摘できる。5 ページの第 9 ~ 14 講が調査の進行プロセスにあたる B タイプの中心部分であるが、それだけではなく、総論（第 1 ~ 4 講）と調査倫理（第 15 講）に関する授業は、A タイプと同様、B タイプでも外すことはできない。また、B タイプの第 5 ~ 8 講には調査技法と分析技法に関する授業が配列されているが、これは A タイプの第 5 ~ 13 講を圧縮した形になっている。

以上から、A タイプと B タイプは力点の置き所が違うだけであって、本質的に変わりはないと言えよう（それ故、各大学から提供された授業内容の B タイプに即した分類結果は、その掲載を省略した）。

今回の作業を通して、F 科目には「技法中心」と「プロセス中心」という二つの基本的視点があることがわかった。また、総論、調査 / 分析技法、調査プロセス、調査倫理などの基本的項目も索出することができた。

今後の課題としては、これらの視点と項目のさらなる検討、これらの項目のどこを重視して授業を組み立てるかという授業内容の取捨選択と重みづけの工夫、さらにはいわば応用編として特定の社会学分野に特化した質的方法の授業もありえよう。いずれも個々の教員の教育現場に即した問題意識に負う部分が大きいと思われる。

4 . Aタイプ 調査技法と分析技法を中心に

- 第 1 講 社会調査の目的
- 第 2 講 質的調査の概説
- 第 3 講 調査と理論
- 第 4 講 質的方法と量的方法

- 第 5 講 フィールドワーク
- 第 6 講 参与観察
- 第 7 講 インタビュー

- 第 8 講 ライフヒストリー
- 第 9 講 ドキュメント分析
- 第 10 講 内容分析 (テキスト分析)
- 第 11 講 会話分析、エスノメソドロジー
- 第 12 講 構造分析 (マクロ・エスノグラフィー)
- 第 13 講 さまざまな質的方法

- 第 14 講 質的調査の実際
- 第 15 講 質的調査と調査倫理

5 . Bタイプ 調査の進行プロセスを中心に

- 第 1 講 社会調査の目的
- 第 2 講 質的調査の概説
- 第 3 講 調査と理論
- 第 4 講 質的方法と量的方法

- 第 5 講 調査技法 1 (文献的方法)
- 第 6 講 調査技法 2 (フィールド的方法)
- 第 7 講 分析技法 1 (実証的方法)
- 第 8 講 分析技法 2 (解釈学的方法)

- 第 9 講 調査の枠組み (問題、視点、方法、作業仮説、調査項目)
- 第 10 講 調査の準備 (調査地や事例の選定、現地交渉、予備調査)
- 第 11 講 本調査 (補充調査も)
- 第 12 講 フィールドノート (各種記録用の機器も)
- 第 13 講 記録の整理
- 第 14 講 レポートの作成 (データの分析)
- 第 15 講 質的調査と調査倫理

6 . 各大学より提供された授業内容の分類 Aタイプに即して

凡例：各大学の「F科目説明書」(巻末資料参照)の記載事項をそのまま転記した。
行頭の「・」から次の「・」までが1コマ分の記載事項である。

第1講 社会調査の目的

- ・ 社会調査の方法を学ぶことの目的について
- ・ なぜ調査をしなければならないのか？
- ・ 講義の目的
- ・ エスノメソドロジー・会話分析・成員カテゴリー化分析・相互行為分析・フィールドワークの各方法を習得すると同時に、その方法をもちいて現実の社会の人々の相互行為や推論を分析する。
- ・ 文脈的理解(『分厚い記述』)という目的
- ・ 現代文化における個人的行為について

第2講 質的調査の概説

- ・ 質的調査法に関する概説
- ・ 定性的調査法(広義のフィールドワーク)とは何か
- ・ 質的調査の特性について
- ・ 社会学における質的調査(質的調査の具体例を考える)
- ・ シカゴ・モノグラフと質的分析法
- ・ 自己とは何か(調査する自己とされる自己、リフレキシビティ)
- ・ 理論と実践の中間論理

- ・ 質的調査の技法(インタビュー、参与観察、ドキュメント分析、その他)
- ・ 質的データの分析方法の概要(インタビュー、参与観察、ドキュメント分析など)
- ・ いろいろな質的調査の方法
- ・ 質的調査法の概要と種類

第3講 調査と理論

- ・ 質的調査における認識論
- ・ 歴史的分析和比較分析

- ・ 質的調査に際しての研究視点
概念の創造
データ分析の論理
- ・ リサーチ・クエスチョンから仮説へ：探索的研究と仮説検証的研究
- ・ 仮説検証型と問題発見型調査

第4講 質的方法と量的方法

- ・ 実証主義とは何か？
- ・ 質的データとは？（社会学における質的データについて）
- ・ 質的分析法と社会学
- ・ 社会学における質的データと量的データ、および分析方法全般についての比較
- ・ 質的調査と量的調査のフィードバック
- ・ 定性調査と定量調査
- ・ 量的調査と質的調査
- ・ 質的データと量的データ
- ・ 質的データにおける代表性
- ・ 質的データにおける信頼性
- ・ 質的データ分析における妥当性
- ・ 質的データの分析における主観性と客観性の問題について

第5講 フィールドワーク

- ・ フィールドワークの諸技法
- ・ フィールドワークとコミュニケーション
- ・ フィールドワークの経験 : フィールドワークへの参入とアクセス
フィールドワークの経験 : 参加・観察・メモ取り
フィールドワークの経験 : フィールドノーツのつけ方と加工
- ・ フィールドワーク(1): フィールドワークとは何か？
フィールドワーク(2): フィールドワークの方法論
フィールドワーク(3): フィールドワークの実践
- ・ フィールドワークと参与観察法について
フィールドワークの例
- ・ エスノグラフィー・モノグラフについて
- ・ エスノグラフィー法とシカゴの伝統

第6講 参与観察

- ・ 質的調査の実際：参与観察
- ・ 参与観察法
- ・ 参与観察法とその特徴
- ・ 参与観察法の実践
 - 参与観察法の進め方
 - 参与観察法のデータ収集と分析
- ・ 参与観察法1：一般的解説
 - 参与観察法2：実践的アドバイス
- ・ 非参与観察法1：一般的解説
 - 非参与観察法2：実践的アドバイス
- ・ 参与観察法とライフヒストリー法の歴史と基本概念（シカゴ学派を中心に）
 - 参与観察法とライフヒストリー法の歴史と基本概念（実証主義からの転回）
- ・ 参与観察の事例紹介

第7講 インタビュー

- ・ 質的調査の方法：インタビュー
- ・ インタビュー法
- ・ インタビューの方法
- ・ 聞き取り調査
- ・ 聞き取り、インタビューのノウハウ
- ・ 調査技法の習得（インタビュー法）
- ・ 羅生門的聞き取り法
- ・ インタビュー法の詳細：テーマや対象者によるインタビューの多様な形、インタビュー実践にまつわる具体的問題、倫理的問題
- ・ 聞き取り調査とその特徴
 - 聞き取り調査の技法
 - 聞き取り調査のデータ分析
- ・ 社会関係としてのインタビュー（「ラポール」という擬似関係）
- ・ イディオムとモデルストーリーとマスターナラティブ
- ・ インタビュー法1：一般的解説
 - インタビュー法2：実践的アドバイス
- ・ インタビュー法概論：聞き手と語り手の相互作用、インタビューとカウンセリングの異

同

- ・インタビュー法概論：インタビューの種類、インタビュー法の特徴、インタビュー法が適しているテーマ、インタビュー法の手順
- ・インタビュー・聞き取り調査（１）：インタビューの方法論
インタビュー・聞き取り調査（２）：インタビュー・聞き取り調査データの分析
- ・インタビューの事例紹介
- ・聞き取り調査の事例紹介
- ・インタビュー調査のすぐれた先行例

第8講 ライフヒストリー

- ・質的調査の実際：ライフヒストリー
- ・ライフヒストリー
- ・ライフヒストリー法
- ・生活誌
- ・生活誌的手法
- ・ライフヒストリー調査とは
- ・ライフヒストリーの分析
- ・ライフヒストリー分析の方法
- ・ライフヒストリー（１）：ライフヒストリーとは？
ライフヒストリー（２）：ライフヒストリー調査の方法論
- ・ライフストーリーの物語的構成
ライフストーリーの分析・解釈の枠組み
- ・ライフストーリーの社会的脈絡（カテゴリーの抽出）
- ・参与観察と生活史法
生活史法と社会学
- ・高度成長期以降の農村社会と農村社会学：個人の生活史的次元に注目した調査法
生活史調査法の農村研究への適用可能性１：社会構造分析への接合
生活史調査法の農村研究への適用可能性２：主体形成論へ寄与
- ・ライフヒストリー／ライフストーリーの理論と方法：ライフヒストリー法の歴史とアプローチ
ライフヒストリー／ライフストーリーの理論と方法：社会関係としてのインタビュー
ライフヒストリー／ライフストーリーの理論と方法：解釈の枠組みと方法
ライフヒストリー／ライフストーリーの理論と方法：語りの様式と社会的文脈

- ・相互行為としてのライフヒストリー（構築主義、会話分析）
- ・語らせることと語られないこと
- ・物語論：大きな物語と小さな物語、共有された物語と個人の物語、ナラティブセラピー
- ・ライフヒストリー法と会話分析

第9講 ドキュメント分析

- ・ドキュメント分析、ライフヒストリー分析
- ・さまざまな生活記録の分析法
- ・ヒューマン・ドキュメント手法
- ・ドキュメント分析の事例
- ・さまざまなドキュメント分析
 - ドキュメント分析の調査企画
 - ドキュメント分析の技法
 - ドキュメント分析のデータ収集と分析

第10講 内容分析（テキスト分析）

- ・テキストの分析
- ・テキスト分析の方法
- ・既存の資料の収集とテキスト分析
- ・テキストの内容分析：新聞記事などの分析法
- ・広報誌、新聞記事の収集と分析
- ・新聞内容分析
- ・生活記録、テキスト分析等について
- ・内容分析とは何か：事例・目的・定義
 - 内容分析の歴史（1）：プロパガンダ研究から内容分析へ
 - 内容分析の歴史（2）：内容分析から培養理論へ
 - 様々な内容分析：メディア間比較、国際比較、時系列比較、外的基準との比較
 - 日本の内容分析：新聞記事を対象とする研究例
- ・分析単位設定とコーディング
 - コーディング・シートの作成と修正：事例に学ぶ分析プロセス
 - 内容分析の妥当性：妥当性の定義と諸類型
 - 内容分析の信頼性：コーダーのトレーニングとコーディングの一致度

第11講 会話分析、エスノメソドロジー

- ・会話分析の方法
- ・会話分析
- ・会話分析の例
- ・会話分析について、会話の順番取りシステムと、隣接対の問題を中心に学ぶ
- ・会話分析とエスノメソドロジー
- ・ガーフィンケルのエスノメソドロジーの基本的な考え方を学ぶ
- ・社会成員が、自分や他の社会成員をどのようにして分類しているか、その方法を学ぶ(成員カテゴリー化分析)。とくに自殺志願者がどのようにして救いの手を求めているかを、その方法を検討する。
- ・身体的行為と会話の結びつきについて学ぶ。相互行為分析について学ぶ。
- ・子供の相互行為場面をフィールドにして、カテゴリー化と相互行為の結びつきについて学ぶ。
- ・車いす使用者のフィールドワークを元に、カテゴリー化と相互行為の結びつきについて学ぶ。
- ・男女の会話と性別カテゴリーの問題について学ぶ。
- ・ロボットとテレビ会議システムを例に、テクノロジーと身体的相互行為の関係について学ぶ。

第12講 構造分析(マクロ・エスノグラフィー)

- ・戦前期の農村と農村社会学：イエとムラの民俗文化的次元に注目した調査法
戦後農村社会の変動と農村社会学：村落社会の構造次元に注目した調査法
- ・組織調査の最新動向
組織調査分析の手法1, 2

第13講 さまざまな質的方法

- ・分析的帰納法の研究例
- ・グラウンディッド・セオリー・アプローチについて
- ・グラウンディッド・セオリーに基づく研究例
- ・都市生態学手法(都市社会学からみた地域社会に生じる問題)
- ・民俗学的手法
- ・マッピング法
- ・考現学的手法

- ・ 路上観察法
- ・ 文献解題的手法、書誌解題
- ・ 地域社会調査のトライアングレーション
- ・ アセスメント調査と評価調査

第 1 4 講 質的調査の実際

(a) 発問から現地に行くまで

- ・ 自分の関心を表明すること
- ・ 質的調査の準備：問いの立て方
- ・ 質的調査の準備：仮説と文献検索
- ・ 調査プランの策定と技法の選択
- ・ 依頼状作成の仕方とアポイントの取り方の説明

(b) 現地で

- ・ 街の情報を読む
- ・ 聞き上手になる
- ・ 記録魔になる
- ・ 調査技法の習得（フィールドノート）
- ・ 記録ノートの分析とまとめ
- ・ 複数人によるノート記録の共用法
- ・ 会話分析、記録ノートの取り方
- ・ ノートの取り方とデータ提示のしかた
- ・ ヒアリング実施上の注意。ヒアリングにおける典型的失敗についての注意

(c) データ処理

- ・ 質的調査の分析手続き
- ・ インタビュー後の分析作業：コーディング、編集、考察
- ・ 調査データの保管とコーディング（整理、分類法）

(d) 論文、レポートの書き方

- ・ 発表資料の作成技術
- ・ 論文の書き方
- ・ 報告書の作成
- ・ モノグラフの作成
- ・ レポート作成の技法
- ・ レポーティングの技術：指標作成と視覚的表現

- ・レポートの書き方
- ・インタビュー論文執筆のための文章表現など

第15講 質的調査と調査倫理

- ・フィールドワークの倫理
- ・質的データ収集における調査倫理
- ・質的調査の倫理：調査者 被調査者関係とラポール
- ・調査倫理とパートナーシップ
- ・フィールドワークの経験：調査者 被調査者の相互行為、調査倫理とパートナーシップ
- ・フィールドワーカーの立場と倫理
- ・テキストの権力性について
- ・真実とプライバシー

参考文献

- Ballard, J.(ed.), 2001, *Qualitative Research Methods:Syllabi and Instructional Materials*(2nd ed.), ASA Resource Materials for Teaching
- Bertaux, D., 1997, *Les Récits de Vie* (D. ベルトー , 小林多寿子訳, 2003, 『ライフストーリー エスノ社会学的パースペクティブ』 ミネルヴァ書房)
- Burr, V., 1995, *An Introduction to Social Constructionism* (V. バー , 田中一彦訳 , 1997, 『社会的構築主義への招待 言説分析とは何か』 川島書店)
- Emerson, R., R. I. Fretz, and L. L. Shaw, 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes* (R. エマーソン他 , 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳 , 1998, 『方法としてのフィールドワーク 現地取材から物語作成まで』 新曜社)
- Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung* (U.フリック , 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳, 2002, 『質的研究入門 人間の科学 のための方法論』 春秋社)
- 海保博之・原田悦子編, 1993, 『プロトコル分析入門 発話データから何を讀むか』 新曜社
- 木下康仁, 1999, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』 弘文堂
2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』 弘文堂
- Langness, L. L. and G. Frank, 1981, *Lives:An Anthropological Approach to Biography* (L.ラングネス他 , 米山俊直・小林多寿子訳, 1993, 『ライフヒストリー研究入門 伝記への人類学的アプローチ』 ネルヴァ書房)
- Lofland, J. and L. H. Lofland, 1995, *Analyzing Social Settings:A Guide to Qualitative Observation and Analysis* (J.ロフランド他 , 進藤雄三・宝月誠訳 , 1997, 『社会状況の分析 質的観察と分析の方法』 恒星社厚生閣)
- Merriam, S. B., 1998, *Qualitative Research and Case Study Applications in Education*(S.B.メリアム , 堀薫夫・久保真人・成島美弥訳 , 2004 『質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ』 ミネルヴァ書房)
- 箕浦康子編, 1999, 『フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門』 ミネルヴァ書房
- Mulvey, K.(ed.), 2000, *Research Methods Courses: Syllabi, Assignments, and Projects*(5th ed.), ASA Resource Materials for Teaching
- Plummer, K., 1983, *Documents of Life* (K. プラマー , 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身訳, 1991 , 『生活記録の社会学 方法としての生活史研究案内』 光生館)
- Punch, K. F., 1998, *Introduction to Social Research:Qualitative and Quantitative Approaches* (K. F.パンチ, 川合隆男監訳 , 2005, 『社会調査入門 量的調査と質的調査の活用』 慶應義塾大学出版会)

- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 佐藤郁哉, 2002, 『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社
- Psathas, G., 1995, *Conversation Analysis: The Study of Talk-in-Interaction* (G.サーサス, 北澤裕・小松栄一訳, 1998, 『会話分析の手法』マルジュ社)
- Pope, C and N. Mays(eds), 2000, *Qualitative Research in Health Care* (C. ポープ他, 大滝純司監訳, 2001, 『質的研究実践ガイド 保険・医療サービス向上のために』医学書院)
- Schatzman, L. and A. L. Strauss, 1973, *Field Research: Strategies for a Natural Sociology* (L. シャッツマン他, 川合隆男監訳, 1999, 『フィールド・リサーチ 現地調査の方法と調査者の戦略』慶應義塾大学出版会)
- Strauss, A and J. Corbin, 1990, *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques* (A. ストラウス他, 南裕子監訳, 1999, 『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院)
- 上田尚一, 2003, 『質的データの解析 調査情報のよみ方』朝倉書店
- Willig, C., 2001, *Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method* (C. ウィリッグ, 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至訳, 2003, 『心理学のための質的研究法入門 創造的な探求に向けて』培風館)
- やまだようこ編, 2000, 『人生を物語る 生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房
- 好井裕明・山田富秋・西坂仰編, 1999, 『会話分析への招待』世界思想社

資料

大学 (年度)

授業科目説明書

(/)

対応認定科目記号			組み合わせ科目	
授業科目名				
題目(注)				
開設学部・学科				
授業時間数			分 ×	週
履修基準年度(学年)			年生	
科目認定番号				
申請種別(注)				
担当教員所属・職・氏名	所属	職	氏名	
			(ふりがな)	
講義目的				
授業内容の詳細				
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
授業方式				
成績評価方法・基準				
教科書(著者名、書名、発行所、出版年)				

注) ・とくに「題目」のない場合は、記入する必要はありません

・申請種別の欄には1.初申請 2.既申請(変更箇所あり) 3.既申請(変更箇所なし)のいずれかをご記入下さい。

認定機構使用欄

受付	入力		備考